

# 第1章 戦場

北海道での終戦②

## わずか八か月で海軍少尉に

神埜 努さんのお話から

○徴兵検査 徴兵適齢の男子に、兵役の適否を身体・身上にわたって検査すること。

○高角砲 敵の航空機の攻撃から護るために作られた大砲。帝国陸軍では高射砲、帝国海軍では高角砲と呼んだ。

○海軍士官 海軍の少尉以上。日本海軍の場合、将校および将校相当官の総称。

○軍刀 軍用に供された刀剣。

○慰問袋 戦地にいる兵士などを慰め、不便をなくし、士気を鼓舞するため日用品などを送った袋。日用品や衣服付属品、食料品、お守り札などが入っている。

私は、昭和十九年（一九四四年）の春に徴兵検査を受けました。その時、私は北海道第一師範学校（現在の北海道教育大学札幌校）にいたのですが、昭和十九年九月に六か月繰り上げ卒業となり、横須賀海軍砲術学校に入学しました。師範学校を卒業した同期は百二十人いましたが、海軍の予備学生の試験に受かった者は七人、そのうち六人は飛行科に行き、私一人が一般兵科の採用でした。一般兵科も陸戦、砲術、通信、航海、対潜などに分かれているのですが、私は大砲関係の砲術学校に入りました。空に対して撃つ高角砲とか高射機関銃で飛行機を落とす指揮官を養成する対空というところにいました。

海軍士官ということで、軍装品などはひと通りきちんと支給されました。第一種軍装の服はボタンなしで白い手袋・短剣です。任官したときは百円の軍刀まで学校が世話してくれました。

学校では実技と講義、それに海軍士官としてのしつけがとても厳しかったです。一度殴られたこともありました。夜七時から二時間ぐらい自習時間があり、そのときに軍服の下に寝間着を着ている者が二人いました。着ていると、とても温かいからです。それがばれてしまい、「そういう決まりはない、たるんでいる。」ということ、九時ぐらいに約三百人の学生全員が寒い校庭に集合させられ、教官も全部出てきました。そこで全員が殴られたのです。

一度、姉の一人が慰問袋を送ってきました。中にはイモのでんぷんで作った甘い飴が入っていました。教官に呼ばれて、送り主について聞かれたので、姉からのものだというのを伝え

○戦艦「長門」 帝国海軍の戦艦で、長門型戦艦の一番艦。

○空母「信濃」 帝国海軍に所属した航空母艦。昭和十九年（一九四四年）未

完成のまま、回航中に米潜水艦の雷撃をうけ、一度も実戦に使用されることがなく沈没した。

○機銃陣地 機関銃で敵を射撃するためにつくられた陣地。

○落下傘部隊 飛行機からパラシュート（落下傘）を着けて飛び降り、地上で戦う部隊

○マリアナ諸島 表紙裏地図

○天雷 帝国海軍が開発し、太平洋戦争後半に試作した局地戦闘機。

○兵舎 兵隊が寝たり食べたりするなど、日常生活をする建物。

○グラマン アメリカの

たのですが、「ここは教育隊なので慰問袋は受け付けません。送り返せ。」というのです。すでに小包はばらされていたのですが、包み直して送り返しました。今だからこそ言えることです。すが、絶対ばれないように包み直すときにこっそり食べました。隣のベッドの仲間にも少し分けました。

戦艦「長門」での乗艦訓練、幻の空母「信濃」の見学、高角砲の実弾射撃訓練などを経て、わずか八か月の速成教育で、昭和二十年六月一日に砲術学校を卒業し、満二十歳で海軍少尉に任官し、千歳航空基地に配置されました。もうそのころは死ぬ覚悟はできていました。私は子どものころから体が弱かったので、果たして訓練に耐えられるか自信がなかったのですが、やるだけのことをやれば何とか体がもつものだという自信はつききました。

千歳航空基地では、機銃陣地の指揮官となりました。近くでは、海軍の攻撃機が陸軍の落下傘部隊を乗せ、マリアナ諸島の米軍基地を襲撃する海陸共同作戦の特攻・天雷部隊が猛特訓中でした。私たちも機銃訓練に励みました。訓練中は兵舎はなく、土の中に穴を掘ったものが仮住まいでした。風呂などないので、ドラム缶にお湯を沸かし入っていました。

七月にはアメリカが東北・北海道に対する大攻撃をしかけてきました。そのときに津軽海峡の連絡船はほとんど全滅しました。千歳にもグラマンが飛んできて、高射砲を撃つたけれど



イメージ図

横須賀海軍砲術学校での訓練

わずか八か月で海軍少尉に

軍用機メーカー。第二次世界大戦では、戦闘機F4F、F6Fが有名。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

○B29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万メートルの高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

も、命中させることができなかつたそうです。

ある日曜日、千歳航空基地に父が面会に来たので、知人の家で食事をすることにしました。隊で支給されて残った酒、煙草、ようかんなどを持って行ったところ、大変喜ばれました。物資不足のときですから、これが唯一の親孝行だったかもしれない。同期の中には、遠い南方や艦船に配置された者も大勢いました。私は郷里の南幌町に最も近い基地に配属されて幸いでした。

広島や長崎に原爆が落ちたことを聞きました。また、ソ連が参戦したことも知り、「これは容易ではない、いよいよ最後だな。」という気持ちにもなっていました。八月十五日に終戦となり、天雷部隊の陸軍将校と一緒に玉音放送を聞いたときは、ホッとしたという感じと、これで終わったんだという思いがありました。しかし、十六日になっても、具体的な指示がないので、とにかく訓練は続けました。「B29が一機、函館方面に向かっている。千歳に強行着陸の可能性大なり。警戒を要する。」という情報が入ってきました。「よし、敵が一発でも撃てきたら撃ち返すぞ。」と待ち構えていました。幸いにも千歳への攻撃はありませんでした。

終戦後は混乱のなか、防空壕に隠してある物資を持ち出していく者もいました。私はそういうものを取り締まるために剣を下げ、ピストルを持って、止める立場にありました。郷里の南幌から農家の人が訪ねてきたこともありまし



イメージ図  
慰問袋に日用品などを入れて兵士を慰めた



○室蘭街道 国道36号線の通称。札幌市から室蘭市へ至る一般国道。

○信管 弾薬の種類と用途に応じて、弾薬を作動させるための装置。

た。何でもいいから欲しいというのです。工事をするためのつるはしとかスコップもあります。室蘭街道は飛行機が着陸できるように、厚い板を敷いてもあります。それをはいで持っていくだけでも相当な財産になるのです。その後、軍を離れ九月には釧路の寿小学校に教師として赴任することになりました。

戦争中、陸軍がかなりの砲弾を海に投げ込んだらしく、波で磯に入ってきた砲弾の信管を子どもたちが拾ってくるのです。隣のクラスの子どもが拾ってきた信管を机の上でたたき、それが破裂して、前の席の子どもの背中に刺さったという事故がありました。また、別の学校では海岸でたき火をしていたとき、埋まっていた砲弾があり、爆発してけがをしたという事故もありました。

今でも当時のことを思い出すことがあります。私が配置されたかもしれない見学で乗艦した空母「信濃」は、艦が完成するまでに約四年かかっています。この「信濃」も東京湾から瀬戸内海に移そうとしたとき、追跡していた敵の潜水艦に沈められました。戦争は多額のお金が使われただけではなく、多くの人命をも失うこととなりました。

現在、戦争放棄は日本国憲法第九条で示してあります。その精神を歴史の上に立って考えてみなければならぬと痛切に感じます。今の若い人たちには、そういった歴史についてしっかりと勉強してほしいのです。それが外国との交流へとつながり、国民の幸せにもつながるということを真剣に考えなければならぬと思っています。

**DATA**

平成21年度豊平区平和事業  
聴き取り  
・平成21年2月26日  
・月寒まちづくりセンター



**神埜 努(かんの・つとめ)さん**

・大正13年(1924年)生まれ  
・札幌市豊平区在住

わずか八カ月で海軍少尉に